

# VII. 精神から存在者へ：言文一致運動と大逆事件（2）

## VII-1 自然主義文学——事実を事実の儘自然に書くと云ふ事

——小説は、たんなる虚構を扱うのではなかった。歴史が取りこぼした《些細な出来事》を拾い集めると考えられた。それは、無形（＝精神）のものに形を与える《言文一致運動》とも重なりあうものである。

### ○ 自然主義文学の隆盛

神長瞭月「ハイカラ節」1908（※ 「魔風恋風」は自然主義作家小杉天外の作品）

ゴールド眼鏡のハイカラは／都の西の目白台／女子大学の女学生／片手にパイロン　ゲーテの詩／口には唱える自然主義／早稲田の稲穂がサーラサラ／魔風恋風そよそよと

Cf.) 石川啄木「一年間の回顧」1910年（文学の「解放」とはなにを意味しているのか？）

自然主義は文学を解放した。少くとも、しようとした。これは近数年間に於ける日本文学上の一大事実である。此事実が、明治文学史の頁を以前と以後に画然として区別するものである事に就いては、後世の史家も必らず吾人と意見を共にすべきものである。

### ○ 20世紀初頭の言葉と現実

——ひとが感じる言葉（史料）と現実（実態）とは、どのような関係を結んでいたか。

田山花袋「事実の人生」1906年

小説を書くには、実際自分が遭遇した事とか、親しく関係した事とか、モデルがある方が好いでせう。其方が書いて書きよばかりでなく、深い価値のある作品が出来る。好く自然派の作家達の言葉に、自分を描けと云ふが、実際です、私なぞも其積りでは居るが、何しろ見聞も狭い上に、色々の注文や故障があつて、何うも思ふやうにならぬ、ツイ空想にまかせて書くやうな事になる。然し其れは無論結構な事でないから、今後は勉めて事実につけて書かうと思つて居る。…要するに事実を事実の儘自然に書くと云ふ事は作者に取つて大なる味方です、此要意が肝要だらうと私は考へます。

→ 言葉と現実は一体のもの、あるいは言葉が現実に至る（＝予言となる）という確信。

岩野泡鳴『神秘的半獣主義』1906

若し宇宙に生命が満ちて居るとしたら、この表象が溢れて居るのである。…一つの表象としては有限に見えるものも、その表象のそのまた表象となつて行くので、生きて居るのだ。人は数を計えて居るばかりでも、その生命は続いて行く。然し、一刹那をまごついて、その位を忘れてしまうと、もう別な人間になつて居るのである。存在はいつも常がない、また限りのないものであるから、その間にあつて、表象が僕等の運命の杖となつて呉るのである。

→ 言葉は現実と同じ表象の連鎖として把握されている。

※ 坪内逍遙は、当時、本物の新聞記者が新聞記者を演じ、非職軍人が旅順攻撃を演じた演劇に対してこう言っている。

精細確実な深刻な人間記録〔ヒューマン・ドキュメント〕を欲する以上は勢ひさうならざるを得ないのである。実行即文芸と主張するのも道理だと思ふ。（「写実劇と素人俳優」1910）

※ また田山花袋は別のところで、こうも言っている。

あらゆる本は、何んな零碎な本でも、冊子でも、すべて人間生活の状態の『あらはれ』である。（「小説新論」）

★ ここには、自然主義・写実主義といいながらも、現実の世界と虚構の世界の奇妙な混淆が見られる。

But: 批判もあった。

石川啄木「硝子窓」1910年6月

それは何れにしても、文学の境地と実人生との間に存する間隔は、如何に巧妙なる外科医の手術を以てしても、遂に縫合する事の出来ぬものであつた。仮令我々が国と国との間に境界を地図の上から消してふ時はあつても、此の間隔だけは何うする事も出来ない。…それがあつたが為に、蓋し文学といふものは永久に其の領土を保ち得るのであらう。それは私も認めない訳には行かない。が又、それがあるが為に、特に文学者のみの経験せねばならぬ深い悲しみといふものがあるのではなからうか。そして其の悲みこそ、実に彼の多くの文学者の生命を滅すところの最大の敵ではなからうか。

同「時代閉塞の現状（強権、純粹自然主義の最後及び明日の考察）」1910年8月

自己主張的傾向が、数年前我々が其新しき思索的生活を始めた当初からして、一方それと矛盾する科学的、運命論的、自己否定的傾向（純粹自然主義）と結合してゐた事は事実である。…かくて今や「自然主義」といふ言葉は、刻一刻に身体も顔も変つて来て、全く一箇のスフィンクスに成つてゐる。「自然主義とは何ぞや？ 其の中心は何処にありや？」斯く我々が問を發する時、彼等の中一人でも起つてそれに答へ得る者があるか。否、彼等は一様に起つて答へるに違ひない、全く別々な答を。

- 「間隔」についての指摘。今日のわれわれからも理解しやすい啄木の批判。言葉（「文学の境地」）と現実（「実人生」）は異なるし、「自己主張」と「自己否定」（言文一致運動でいえば、残るものと消え去るもの）が混在することは「矛盾」であらう。（※ 自己主張と自己否定については後述。）

## VII-2 大逆事件

1910年5月各地で多数の社会主義者が明治天皇暗殺を計画したとの理由で検挙され、翌年1月、26名の被告が死刑その他の刑に。幸徳事件とも。幸徳秋水、宮下太吉、菅野スガら12名は大逆罪で1月24～25日処刑。その後の研究により、宮下ら社会主義者の一部が明治天皇暗殺を謀議したことに口実を設け、社会主義の根絶をはかって全国にわたる大陰謀団の存在をでっちあげたというのが真相とされる。宮下、新村忠雄、古河力作、菅野の4人が爆弾による明治天皇暗殺を謀議したことは推定できても、幸徳がこの謀議にどれだけ関係していたか疑わしいとされた。

- 審判としての典型的な歴史学の役割を感じさせてくれるもの。ただし、そうした考察は、幸徳秋水の社会主義があくまで「議論」にすぎない（言葉であつて、実行ではない）、という前提に基づいている（実行性を欠いた議論をしただけなのに処刑された、というもの）。
- 大逆事件と文学者のかかわりを論じた研究は多くあるが、すべて、事件が作家にいかなる影響を与えたか、あるいは、作家が事件を批判しえたか、という文脈で語ることが中心。平野謙など。

### ○ 20世紀初頭の文学＝政治（言葉＝実践）という世界

佐藤春夫『詩文半世紀』1963年

当時、一般には自然主義と社会主義とをほとんど同じもののように誤解していた。

田山花袋『近代の小説』1923年

明治四十年から四十二年にわたる間の自然主義運動の猛烈であつたことは、今更こゝにそれをくり返すまでもない。自然主義といふ言葉は何処でも彼処でも言はれた。変な意味にさへ用ゐられた。否、そればかりではなかつた、その尖つた方面は、飽までも実行とつゞいてゐたために一今までのやうに単なる小説の運動ではなしに、社会運動と相連接した形が歴然としてその上にあらはれてゐたがために、後には政府の注意をも惹くやうになつて、不健全な、不道德な、危険な思想であるやうに考へられて行つた。例のほんの芽であつた幸徳秋水等の社会運動とつゞいて行つてゐるやうにさへ思はれた。

- 政治的な運動（社会主義）と文学の運動（自然主義）の奇妙な一致。
- 言葉＝実践は、《権利》という概念の否定ではないだろうか。

Cf. 白柳秀湖「藤村氏の詩及び小説と初期の社会主義運動」1934年

なぜ、藤村の詩と小説とは僕の社会的思弁とあんなにたやすくあんなにきれいに融合することが出来たのであろうか…。

#### ○ 幸徳秋水の「直接行動」の概念

社会主義（アナキズム）において、きわめて重要な「直接行動」の概念。一般的には労働ストライキや小作争議をさすが、究極的には暴力を伴う革命を射程に入れたものとされる。

幸徳秋水「獄中から三弁護人宛の陳弁書」1910年

即ち私共が革命といふのは、甲の主権者が乙の主権者に代るとか、丙の優良な個人若くば党派が、丁の個人若くば党派に代つて、政権を握るといふのではなく、旧来の制度組織が朽腐衰弊の極、崩壊し去つて、新たな社会組織が起り来るの作用をいふので、社会進化の過程の大段落を表示する言葉です、故に厳正な意味に於ては、革命は自然に起り来る者で、一個人や一党派で起し得る者ではありません。

- 「革命は自然に起り来るの作用をいふ」。「自然」とはなにか？

Cf. 田山花袋、前掲書：要するに事実を事実の儘自然に書くと云ふ事は作者に取つて大なる味方です。

- 小説が事実を事実のまま、自然に書くことができる、という自然主義者の前提は、同時に、社会主義の議論そのものが「自然な」もの、すなわち実践であることを示す……。

幸徳秋水、前掲書

人間が活物、社会が活物で常に変動進歩して已まざる以上は、万古不易の制度組織はあるべき筈はない、必ずや時と共に進歩改新せられねばならぬ、其進歩改新の小段落が改良或は改革で、大段落が革命と名けられるので、我々は此社会の枯死衰亡を防ぐ為めには常に新主義新思想を鼓吹すること、即ち革命運動の必要があると信するのです。

- 革命運動＝「新主義新思想を鼓吹すること」。なおかつ、「革命は自然に起り来るの作用」。こうした一見矛盾にみえるものの奇妙な共存がある。
- つまり、言葉そのものが革命運動。したがって、「直接行動」の概念は、同時に革命運動となる。

#### ○ 処刑を受け容れた幸徳秋水

〔処刑を前に、面会に訪れた堺利彦〕「非常のこととは感じないで、なんだか自然の成行のやうに思はれる」。

〔幸徳の回答〕「死刑！ 私には、洵〔まこ〕とに自然の成行である。これで可いのである。兼ての覚悟あるべき筈である。私に取ては、世に在る人々の思うが如く、忌はしい物でも、恐ろしい物でも、何でもない」。（「死刑の前（腹案）」1910年12月）

- 「自然」の前で、処刑を受け容れる幸徳の意志はどこに？ 言葉＝実践という世界。

Cf. 堺枯川「幸徳秋水と堺枯川の問答」『毎日電報』二六一七号、1911年1月21日

（秋）此度の事は政府が余り神経過敏だから当方も神経過敏となつたので、まあ第一にブツかつたんだ、此後もブツかる事が多いだらうよ。（枯）政府も神経過敏に違ひない、僕も当時娑婆にゐたら君と行動を一にしたかも知れぬ、然し君等は実に気の毒だ（秋）イヤ何とも思つてゐないよ、僕等が死んだら後は君等の力を持たねばならぬ（枯）後の事は安心して給へ、僕は君等が僕の代りに死んで呉れるやうに思つてゐる…。

→ 幸徳らの態度は、自然（客観性）のなかで、主観を消し去る一種の自己否定？ そうとは言い切れない。

菅野すが子「死出の道艸」（死刑の前に「最後の面会」の翌日の文章）

然しそこが又人間の自然で有るかも知れない。喜怒・哀楽色に顯はさずといふ東洋豪傑の特徴は、一面からは頗る感ずべき事ではあるが、一面からは又確かに虚偽である。虚飾である。…私は小人である。感情家である。而も極端な感情家である。私は虚偽を憎む。虚飾を悪む。不自然を悪む。私は泣きもする。笑ひもある。喜びもする。怒りもする。私は私丈の天真を流露して居ればよいのである。人が私を見る価値如何などはどうでもよい。

→ 一種のロマン主義的な「自己主張」。大逆事件の被疑者たちには、啄木のいう「自己主張」と「自己否定」の自然な（不思議な）混在が見られる。

○ パラドックス——生きるとは死ぬことである？

幸徳秋水、前掲「死刑の前」

万物は皆な流れ去るとヘラクリタスも言つた、諸行は無常、宇宙は変化の連続である。

其实体〔サブスタンス〕には固より終始もなく生滅もなき筈である、左れど実体の両面たる物質と勢力とが構成し仮現する千差万別・無量無限の個々の形態〔フォーム〕に至つては、常住な物は決してない、彼等既に始めが有る、必ず終りが無ければならぬ、形成されし者、必ず破壊されねばならぬ、成長する者、必ず衰亡せねばならぬ、厳密に言へば、万物総て生れ出たる刹那より、既に死につつあるのである。

→ 生と死の一致。言葉（生きたもの、たえず変化するもの）と歴史（死によって過去に固定されたもの）の一致という奇妙な世界。世紀転換期の日本。文学と歴史の混交。

→ 文学と歴史とが交差する世界。言葉と出来事との関係は、たえず同じなのではない。時代によって、変化している。言葉と出来事のこうした一致は、自由を「権利」ではなく、実践の問題にしている。

石川啄木「ココアのひと匙」1911年

我は知る、テロリストの  
かなしき心を——  
言葉とおこなひとを分ちがたき  
たゞひとつの心を、  
奪はれた言葉の代りに  
おこなひをもて語らむとする心を、  
われとわが身体を  
敵に擲げつくる心を——  
しかして、そは真面目にして熱心なる人の常に有つかなしみなり。

はてしなき議論の後の  
冷めたるココアのひと匙を吸りて、  
そのうすにがき舌触りに、  
我は知る、テロリストの  
かなしき、かなしき心を

佐藤春夫「愚者の死」1911年

千九百十一年一月二十三日  
大石誠之助は殺されたり。

げに厳肅なる多数者の規約を  
裏切る者は殺さるべきかな。

死を賭して遊戯を思ひ、  
民俗の歴史を知らず、

日本人ならざる者  
愚なる者は殺されたり。

「偽より出でし真実〔まこと〕なり」と  
絞首台上の一語その愚を極む。

われの郷里は紀州新宮。  
渠〔かれ〕の郷里もわれの町。

聞く、渠が郷里にして、わが郷里なる  
紀州新宮の町は恐懼せりと。

うべさかしかる商人の町は嘆かん、  
——町民は憤めよ。

教師らは国の歴史を更にまた説けよ。